

## エディトリアル

地域医療振興協会 総合診療産婦人科養成センター センター長 伊藤雄二  
市立恵那病院 副管理者兼産婦人科部長

多様性、特に性の多様性を認め、尊重しようとする活動が世界的に広まる中、地域医療の現場においてもさまざまな多様性に対応することが求められている。そもそもLGBTQs(Lesbian Gay Bisexual Transgender Questioning Queer)についても全く異なる性的指向と性自認を同じ括りにしていることで、その理解を困難にしているという指摘もあり、最近ではSOGI(Sexual Orientation and Gender Identity)という概念が一般的になりつつある。患者さんや住民のニーズを認め、対応することは地域医療の現場においても重要な課題であるが、そもそも性の多様性の内容さえ理解が進んでいない現状の中、地域の現場で医療を担うスタッフにおいても、正確な知識を知り、予防や医療を行う上でさまざまな多様性にどう向き合い、配慮すべきか、その必要性は高まっている。今回はこのようなニーズを反映して、プライマリ・ケア連合学会において女性医療・保健委員会からセクシュアルヘルス委員会と改組された委員会の新たな活動の方針とその取り組みを紹介いただくとともに、性の多様性という視点から、それぞれの立場で実践かつその普及に取り組んでいる方々に執筆していただいた。

今回のテーマのキーワードは、多様性、性的マイノリティ、LGBTQs、SRHR(Sexual and Reproductive Health and Rights; 性と生殖に関する健康と権利)、包括的性教育等であるが、私自身も含め、読者もそれぞれの用語を目にしたことはあっても、本来の意味や概念を理解する機会は少なく、さらにそれらについて日常的に留意していることはより少ないのではないだろうか。しかし、実際の医療現場ではこの問題が潜在的にあるにもかかわらず表面化していないだけかもしれない。したがって執筆者には、キーワードとなる用語の本来の意味とそれぞれのテーマの意義について、基本的な知識を総論的に述べていただくとともに、埋もれているニーズをどう掘り起こすか、例えば実際の症例や顕在化していない問題の事例、あるいは地域においてpitfallとなり得る具体的な事例などについても紹介していただいた。

地域医療の現場では、まだそれほど必要な知識ではないと思われるかもしれないが、実は患者さんが抱える悩みや問題に気づいていないだけかもしれないし、患者さんやその家族といった医療の対象者のみならず、読者の周囲にいる職員や地域住民にも性の多様性に悩み、苦しんでいる方がいると思われる。本企画が新たな気づきと少しずつでも多様性を認め合うための一助となることを願っている。